

---

# 世界と未来と少女

マークピース

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

世界と未来と少年少女

### 【Nコード】

N2824Z

### 【作者名】

マークピース

### 【あらすじ】

平々凡々、どこにでもいるような高校生、新藤真は、明日から始まる夏休みに思いを馳せていた。が、友人らとボーリングに行った際、突然、真の頭に激痛が走った。そして、この頭痛をきっかけに、彼は『世界争奪戦』に身を投じていく事となる。

『アルカナ』と呼ばれる21人の能力者。果たして、彼らの辿る運命とは -

## プロローグ

突然だが、君に一つ質問をさせてもらおう。

・ 選ばれし者・ ・ ・ と言われて、君は何を思い浮かべる？  
勇者、王、超能力者……まあ、咄嗟に思い浮かぶのはこのくらいだろうか。

私はこう考える。

・ 選ばれし者・ ・ ・ というのは、生まれながらに選ばれているのではなく、生きていく内に選ばれる・ ・ ・ 資格・ ・ ・ を得て、始めて選ばれたと言えるのではないのか、と。

まあ、この話の意味があるかどうか、それは、これから私が語る物語が教えてくれる筈だ。

保障は出来ないがね。

無駄話が過ぎたかな、話を続けよう。

・ 選ばれし者・ ・ ・ とは言うが、選ばれたからには、彼らには何らかの責任や役割があるという事だ。  
それを果たすかどうかは、人にもよるけどね。

じゃあ、これから語る物語について、少し触れていくとしよう。

初めに言っておく。

これは、選ばれるべくして選ばれた、21人の・ ・ ・ 選ばれし者の物語だ。

どんな風に使われたのだった？

それをこれから語っていくんだ。

例えばその中の1人、新藤真。

彼はどこにでもいるような、極普通の男子高校生だ。

だが、とある事件、そして、とある少女との出会いによって、彼の運命は大きく変わる事になる。

果たして彼が迎える結末は、希望か絶望か。

それもこれから語っていく事にしよう。

では、ぼちぼち始めていこうか。

前述したように、これは22人の・・・選ばれし者・・・の物語である。ハッピーエンドで終わるのか、それともバッドエンドを迎えるのか。

それもまた、これから語る事だ。

第1話 覚醒と始まり（前書き）

お目汚し頂ければ幸いです。

## 第1話 覚醒と始まり

ある夏の日の朝。

青い空に白い雲。

太陽はアスファルトを照りつけ、蝉の音が絶え間なく聞こえ続ける。

そんな中、学生服を着た少年、新藤真は自分の通う高校へと向かっている最中だった。

勉強の嫌いな極普通の高校生である真だが、その心は踊っていた。

今日は、彼の通う高校の終業式。

ようやく一学期ともおさらばだ。

明日からは待ちに待った夏休みである。

彼の心は、そればかりに気を取られていた。  
すると

「オラア！」

「危ねえ！」

後ろから飛び蹴りを仕掛けられた。

危険をギリギリで察知し、横に転がり回避する。

慌てて横を見ると、真の予想通りの人物が立っていた。

染め上げられた茶髪に、この付近でも有名な女子校、万文学院の制服を着る少女。

中学時代の後輩、御堂静香だった。

「てめえ……毎回毎回同じような事を」

「あら？マンネリ？だったら次はブロックでも投げつけてみようかな」

「死ぬわ」

真は立ち上がり、埃を払う。

「何でお前がこんなところに居るんだよ。万丈は逆方向だろうが」

「昨日が終業式だったんだ。暇だから図書館にでも行こうかなと思つて」

「……制服で？」

「図書館みたいな公共施設への外出時は、制服着用が義務付けられているの」

「……相変わらず、無駄に規則は守るんだな」

「無駄には余計よ、この凡夫が」

「凡夫で悪かったなこの野郎。てか、俺が先輩だって事忘れてないか？敬えや後輩が」

「え？今更先輩面つすか？ないわー。新藤先輩マジないわー」  
「際限なく腹立つ喋り方だな、オイ」

そんな事を話していると、いつの間にか、真の高校の前まで来ていた。

「おっと、じゃあな御堂。夏休みはなるべく会わないようにしよう

な

「よっしゃ。2日に一回はラブコールしに行ってちゃんよ」

「誤解を招く事言ってるな」

「はは！じゃあね」

「……おい」

「ん？」

「最近、この辺りで通り魔がうるついでるらしいぜ」

「あー、そう言えばそんな話も聞いたわね。それで？」

「……その通り魔って奴は、未成年の女ばっか狙ってるらしい」

「ほうほう。で？何が言いたいのか？ほれほれ、言ってみなさいよ」

「……お前、わざとだろ？」

「え？何の事？さっぱりだよ」

「ったく……つまり、何だ？その……気をつけるよ」

「……あ、ありがとう」

「照れてんじゃねえよ。言わせたくせに」

「て、照れてないわい！」

御堂は舌を出すと、図書館へと走って行った。

すると、そのやり取りを見ていた校門の前に立つ男が、真に声をかける。

「朝から女子生徒と登校とは、随分いいご身分だな新藤」

いかにも小物が言いそうな台詞を放つこの男は、真の通う高校の体育教師、須郷道隆だ。

生徒からの人気がある、人当たりのいい熱血教師なのだが、異性と  
の交際経験はほとんど無いらしい。

そのせいか、高校生らしく異性との青春に勤しんでいる生徒だけに  
は感しかつた。

「ったく。朝から乳繰り合いやがって」

「合ってますん」

「うるせえ。憂さ晴ら……教育的指導だ、抜き打ち身体検査をして  
やる。そこに直ってバッグを寄越せ」

「思いつきり私怨ですよね！？ 『憂さ晴らし』って言いかけまし  
たよね！？」

実際、真のバッグには漫画やゲームなど、持ち込み禁止の物がいく  
つか入っていた。

「問答無用だ。しかもあの制服、万丈だろ？ あのお堅いお嬢様学  
校の生徒をどうやって落とすやがったこの野郎。いや、マジで教え  
てください、お願いします」

「い、いや、あれ別に彼女とかじゃありませんし」

「……え？ そうなの？」

「はい。中学時代の後輩です」

「……………」

須郷はしばらく間を置いて考えると

「そうか、そうだよな。お前にあんな可愛い彼女が出来る筈ないか」

真は須郷をぶん殴りたい衝動を必死で堪えた。  
おそらく、殴りかかった所で返り討ちにされるのがオチだからだ。  
そここうしている内に、朝のホームルームの開始を告げる予鈴が鳴り響く。

「あ、やべー！」

「逃げ逃げ。あ、俺のせいで遅れたとか言つなよ」

真は敢えて何も突っ込まず、自分の教室へと走った。

「2・2」と書かれた教室の前で、真は中の様子を伺っていた。  
すると、既にホームルームは始まっており、担任の中島が出席を取っているようだった。  
中島は須郷と正反対のタイプで、陰湿な嫌味を言う為、生徒からは嫌われている。

真は「おのれ須郷め」と毒づくくと、意を決して教室のドアを開けた。

「すみません、遅刻しました」

「……成績は悪い、遅刻もする。救いようがないな、まったく」

中島は小声で言っているつもりだろうが、思いっきり聞こえている為、真は心中で舌を打つ。

「ちょっと、須郷先生から指導を受けていたので」

「……馬鹿は群れる習性があるようだ。もういい、座れ」

危うく激昂しそうになりながらも、今日を乗り切れば、と、真は心を沈めて席に着く。

すると、隣りから真に向かって小声が囁かれる。

「朝から災難だな、真」

「まあ、今日を乗り切れば夏休みなんだ。あいつの顔見ないでいいと思うとせいせいするぜ」

真の言葉に、隣りに座る級友、堀野雄介は苦笑する。

雄介とは二年生で同じクラスになりまだ日も浅いが、どうもこの二人は気が合うようで、出会ってすぐに打ち解け合った。

「じゃあ、景気付けにボーリングでもどうよ？ 今日昼で終わり

だし」

「お、いいねえ。何人が誘ってくか」

「そうだな。女子が好ましい所だが……まあ、そううまくはいかないわな」

「よく言っぜ。経験豊富そうな面しやがって」

「そんな事ないって。俺って一途だからさ」

「おい、そこ！私語は慎め。まったく、遊びしか頭にないのか」

「……じゃあ、また後でな」

真は、これから始まる夏休みに思いを馳せていた。

盆には実家にも帰省する予定だ。

考えれば考えるほど、放課後が待ち遠しくて堪らなかった。

だが、彼はまだ気付いていなかった。

この日が、この後の行動が、自分の運命を大きく変える事に

放課後、真と雄介はクラスの友人達に声をかけ、ボーリングへと誘った。

すると、その話を聞いていた女子も何人か参加する事となり、気が

つけば10人ほどでボーリング場へと向かっていた。

「予想以上に集まったな。女子も来てくれたし」

「ああ。いつも異常にやる気が入るってもんだ」

「現金な奴だよ、お前は」

ボーリング場に到着すると、平日な事もあり空いていた為、4レーンを使って一行は席に着く。

とりあえず、適当にグループを作り、チーム戦を行う事にした。

「ビリのチームは罰ゲームな」

「いや、ガーター一回でも罰ゲームだろ」

「きつついな」

「おい！ こいつマイシューズ持って来てやがんぞ！」

『何！？』

「ふつ。勝負は始まる前に決まってるんだよ」

「取り上げる。ついでに腕も痛めつけておけ」

『了解』

「や、やめる！ ちよ、ひ、肘鉄だけは！ 肘鉄だけはやめ、あ、ギヤアアア！」

「ま、まあ、その辺にしてあげたら？ 吉井君の腕、青くなってるし」

「さ、坂上さん……あ、ありがとう」

「万死に値する。人間ボウリングの刑だ」

『了解』

「あの、申し訳ありませんが、他のお客様のご迷惑になるので……」

『あ、すいません』

店員に注意を受けながらも、一行のテンションが下がる事はなかった。

それから、真達はボウリングを楽しんだ。

雄介の3連続ガーターで特製ミックスジュースを飲まされたり、吉井が坂本を口説いている事が発覚し、再び騒いでいる所に強面の店長が出てきたりと、とにかく騒がしい一日だった。

だが、何より楽しかった。

またこんな風に乗ればいい、真はそう思った。  
そうして、2時間ほどが経過した頃。

「ちょっとトイレ」

「うんこか、真？」

「女子もいんだからそんな品のない話はやめろ。小便だよ」

そう言うと、真は立ち上がり、トイレへと向かった。

中はガランとしていたが、意外と綺麗になっており、窓から差し込む夏の日差しが磨かれたタイルに反射していた。

真はさつさと用を足し、戻ろうとする。

が、その時

「痛ッ！！」

突然、真の頭を信じられないような激痛が襲った。

あまりの痛みに、その場に立ち竦んでしまう。

頭痛は十分以上続き、声を出さないようにするので精一杯だった。

ようやく痛みが和らぎ、真はよろめきながら立ち上がる

「……………つたく。何だっただ」

頭を押さえながら毒づく真。

その時、ギイという音と共に、トイレのドアが開いた。

入ってきたのは、真のよく知る人物だった。

「……………中島、先生？」

真の担任、中島靖臣は、真を品定めするかのよつな目でじっと見つめる。

やがて、ホツとしたように息を吐く。

「どうやら、まだ……発現……はしていないようだな。手っ取り早く済みそうだ」

「……………？」

訳が分からないと言わんばかりに、真は首を傾げる。

すると、中島の袖から、何か光る物がスルリと滑り落ちた。

それがナイフだと知るのに、長い時間はかからなかった。

「新藤。私に為に死んでくれ」

「ッ！？」

中島は、ナイフで真の心臓を突きにかかる。

真は咄嗟に床に転がるが、彼の右腕をナイフが掠めた。

「お、おい！ アンタ、何しやがんだ！」

「アンタ？ 口の利き方がなっていないようだな」

そう言うと、中島は手前にナイフを投げ捨てる。

その時、信じられないような出来事が真を襲った。

中島が投げたナイフが、突然、浮上し始めたのだ。

当然、中島が触れている訳でもなく、糸によって吊るされている様子も無い。

ナイフは真の胸の辺りの高さまで浮上すると、ピタリと空中で静止した。

今度こそ、真の頭がパニックに陥る。

「な……あ、ありえねえ。どんなトリックを、いや、何で中島が…

…」

「……俺を狙うか……か、聞きたいか？」

中島は、真が見た事も無いような醜悪な笑みを浮かべる。  
真は動く事すら出来ず、ただ立ち尽くすしかなかった。

「それはな……やめた。知らずまま……」

「死ね」という中島の言葉と共に、静止していたナイフが高速で動き出す。

ナイフはまっすぐに真の胸を狙い、どう避けようが、確実に真に直撃する、そんな速度だった。

この時、真の頭には、今までの人生が、出来事が、走馬灯のように駆け巡る。

そして、ある思いが、真の頭に残った。

- 死にたくない。

「う、わああああああああ！！」

真は叫び、両腕をクロスしてガードする。

しかし、真は知らなかった。

そのナイフが、真の腕を貫通し、胸をも貫くほどの……異質……なものだという事に。

そして、ナイフが真の腕に突き……刺さらなかった。

なんと、ナイフは真の体の数cmほど手前で静止していたのだ。どうやら中島が何やら手を加えたと言う訳ではなく、その証拠に、真の姿を見た中島の顔は、驚きと屈辱の色に染まっていた。だが、真も何が起きたのか分かっておらず、目を白黒させている。

「……え？ 生き、てる？」

「ば、馬鹿な……！ 新藤……お前……何をした！」

「何をしただって？ ……発現……させたに決まっているじゃないか」

「！ 誰だッ！」

中島は大声を上げながら、後ろを振り返る。

声の主は、トイレの入り口に立っていた。

眩いほどの金髪に、高い長身。

その風貌は日本人のものではなく、その顔には高い鼻に、青い瞳が輝いている。

「この状況からして、その答えは決まったようなものだろう？」 『魔術師』

「……貴様。何故、私の能力を……！」

「何故だって？ 本気で言っているとしたらお笑い種だね。……アルカナ……だからに決まっているだろう？」

「……どうしてここが分かった？」

「……まさか、本気で言っているのかい？ あれだけ派手に能力を

使っておいて。この辺では……えっと、通り魔、って言うんだっけ？」

「と、通り魔って……中島が!？」

男の言葉に、真は驚きを隠せなかった。

だが、よくよく思い出して見ると、被害者の女性は全員、死角からナイフのようなもので切りつけられたと証言していたと、ニュースで報道されていた。

あのナイフを見れば、それも納得出来る。

「馬鹿みたいに使いまくるから、こうやって場所が割れるのさ。分かった？」

「……肝に銘じておこう。で、やはり貴様も……アルカナ……なんだな？」

「さっきそう言ったじゃないか。やっぱり馬鹿なのかい？それとも、日本ではそれが普通だとか？」

その言葉に、中島は頭に血管を浮き上がらせる。

「……いいだろう。新藤、お前は後で相手をしてやる」

突然、中島は両袖からナイフを取り出すと、それを男に投げつけた。が、男はそれを避けもせず、ただ手を前に突き出すだけだった。

すると、突然、金髪の男の手から炎が噴き出したのだ。

火は勢いよく飛んでいき、中島のナイフを簡単に溶かしていく。そして、火の手は中島までに及び、中島は断末魔を上げる。

「がああああああああ！！」

中島は慌てて横に転がる。

だが、体は大分火にやられており、肉の焦げる嫌な臭いが真の鼻を突いた。

「おや？ 挨拶代わりのつもりだったんだが……随分と深手を負ったようだね。今ので分かったと思うけど、僕のアルカナは『太陽』。熱と炎で敵の体を燃やし尽くす、えげつなさの塊のような能力さ」「き……貴様アアアアア！」

中島は怒り狂い、袖から何十ものナイフを落とし、それらを空中に浮遊させる。

「私の『魔術師』は……ナイフを創り出し、自由に操る能力！貴様にこれがかわせるかアアア！」  
「……ちよつと挑発し過ぎたかな。さすがに、全部を燃やし尽くすのは……」

すると、男は思い出したかのように真を見る。

そして、そのまま真を引っ張り上げると

「僕は、言わば君の命の恩人のようなものだよね？」

「え？あ、ああ、まあ……」

「それじゃあ、その恩を今返してもらおうか」

そう言つと、男は自分と中島の間我真を引っ張り出す。

「なっ、ちょ！」

「大丈夫。君の能力が本物なら、防げる筈だ」

そうこつ言っている内に、中島はナイフを発射させ、真を狙つ。

「うっ！」

真は人生二度目の、死……が近づいてくるのを感じた。

さっきのように腕をクロスさせ、防御の構えを取る。

が、やはり、ナイフが真の体に届く事はなく、全て真の体の数cmほど手前で静止し、そのまま床に落下した。

「……新藤、お前はまた私の邪魔をするのか！」

「殺そうとしたくせに、よく言えたもんだよ」

「な、何だよこれ……何でナイフが刺さらないんだ……？これじゃまるで……」

「化け物、とでも言いたいのかい？」

真の言葉を、金髪の男が代弁する。

「残念だが、その通りだよ」

「え……？」

「君は巻き込まれたんだよ、文字通り『世界』を賭けた戦いにね。まあ、遅かれ早かれ、君にも分かる事だろうけどね」

男の言葉を、真はただ呆然と聞くしかなかった。

束の間の静寂に、外から聞こえる蝉の鳴き声だけが、騒がしく鳴り響いていた。

## 第1話 覚醒と始まり（後書き）

ということ、 「世界と未来と少年少女」、無事に始める事が出来ました。

少し展開が早過ぎたかもしれませんが、お付き合い願えたら幸いです。

2、3日に1話のペースで更新していきたくです。

そんなこんなで次回予告。

襲い掛かる中島の前に、真は訳が分からないまま応戦する。

そして、戦いは決着と共に、新たな戦いの幕を開かす。

次回、「受難と選択」。  
頑張ります。

評価、感想、指摘等頂けたら幸いです。

質問も頂ければお答えします。

## 第2話 受難と選択(前書き)

前半バトル、後半新キャラ登場です。

## 第2話 受難と選択

夏の日差しが、ジリジリとトイレ内の窓から差し込み、トイレ内の温度を上昇させる。

金髪の男と真が会話する中、中島は口を開いた。

「……………おい、お前ら」

「ん？ああ、混ぜて欲しいのかい？」

「……………馬鹿にするのも大概にしるよ貴様らア！」

男の一言に、中島は激昂し、床に散らばっていたナイフが再び浮遊し始める。

「おっと、無駄話が過ぎたかな。それじゃあ、そろそろこの戦いにも幕を下ろそうか……………と言っても、さすがにこのナイフを燃やしつつ、あの男にとどめを刺すのは少しばかり困難だろう。そこで、だ……………俺にやれってか？」

「話が早くて助かるよ。なに、多分、今の君なら一発で気絶ぐらいに持って行けるだろう。意識さえ奪ってくれば、後は僕に任せてもらって結構。面倒だけど請け負ってあげるよ」

「……………まさか、殺すって訳じゃ……………」

「それが一番手っ取り早いんだけどね。まあ、僕も人殺しにはなりたくないし、気絶させるだけで十分さ」

「……………分かった。その前に、ちよっといいか？」



中島は、雄叫びを上げながら、浮遊していた十本ほどのナイフを真達に放つ。

2人はそれを屈んでかわし、真は中島に向かって走り出す。が、ナイフは途中で方向転換をし、背後から真を狙う。

それを見た金髪の男は、苦虫を噛んだかのような顔をする。真と中島に向かって手を突き出す。

「……はあ、まったくもって、嫌になる」

突然、男の手から閃光が放たれる。

「うッ！」

中島は手で閃光を遮り、目を細める。が、彼は失念していた。

真を狙ったナイフが、自分の方に向かっていくという事に。

そして、金髪の男は大声で真に叫ぶ。

「後ろから来ているぞ！」  
「！」

真は、咄嗟に、もう一度それを屈んでかわす。  
そして、ナイフは目が眩んで視界がぼやけている中島に向かって突  
き進んでいく。

「しまっ……！」

中島は慌ててナイフを操作しようとするが、時既に遅かった。  
結果として、中島の体を、二本のナイフが貫いた。  
一本は肺に、そしてもう一本は心臓を捉える。  
二本共、中島の肉を、骨を砕き、体を貫いていった。

「カハッ！」

中島は血を吐き、そのまま膝を着くと、倒れる。  
真は、何が起きたのかまるで分からなかった。  
震える真の元に、金髪の男が歩み寄る。

「……当たり所がよければ、まだ助かったんだけどね。さすがに心  
臓となると……」

男がそう呟くと、真は振り返り、男の襟を掴む。

「どっして……どっしてあんな事しやがった！ 気絶させればいい

って言ったのはためえじゃねえか！ それなのに！」  
「……正直、すまないと思ってる。だが」

と、男は中島が真に投げた二本のナイフを拾い上げ、中島の傷口を指差す。

「心臓の方の傷を見てくれ」

「……肺の傷より……大きい？」

「ああ。この二本は、一見同じ物に見える。だが、おそらく、こちらのナイフは、肺に傷をつけたナイフより威力を高くしてたんだろっね。多分、君の体を貫くぐらいに」

「えっ……」

「他のナイフも、何本かはこれと同じものだと思うよ。さすがは『魔術師』と言った所さ」

「……それを見抜いたのか？ あの一瞬で」

「まさか。買い被りもいい所だよ。ただ、今の君の強度を知っているながら、不用意な行動を取るような男には見えなかったからね」

「……けど、だからって殺さなくても……！」

「……だから、それは悪かったって言っているだろう……それに、君も今に分かるさ」

男はナイフを見ながら言った。

「この『世界争奪戦』がどんなものを、ね」

「世界……争奪戦？」

「……………」

突然、中島が呻き声を上げる。

真は思わず中島を見た。

彼の顔には、後悔のような、そしてどこか寂しそうな表情が浮かんでいた。

そして、それが真の見た、中島の最期の顔だった。

その時、中島の体が、足から煙のように消え始めた。

やがて、それは全身に及び、中島の体はその場から綺麗に消滅した。真は、震えながら、その始終を見届けた。

「な……………何だよ、これ」

「……………死んだ『アルカナ』の末路さ。死体さえ残らない、惨めなものだよ」

「……………『アルカナ』ってなんだよ……………漫画じゃねえんだよ……………このなの……………説明してくれよ！」

「……………僕が説明しなくとも、すぐに、嫌でも分かる事になるさ」

そう言うと、金髪の男は、トイレのドアへと向かう。

「お、おい！」

「……………なんだい？」

「……………あんた、名前は？」

「ああ、名乗ってなかったね。まあ、名乗る理由もないんだけど」

男は立ち止まると、顔だけを真に向ける。

「アルバート・ベイルだ。歳は18。一応、君の名前も聞いておくか」

「あ、ああ。新藤真だ。……とりあえず、ありがとな」

真はアルバートに手を差し出し、握手を求める。  
が、アルバートは微妙な表情を浮かべるだけで、その手を握ろうとしない。

「……やめておこう。敵になるかもしれない人間と馴れ合うわけにもいかないからね。今回は例外として」

「敵って……」

「じゃあ、僕はいくよ。縁があつたらまた会おう。もっとも」

トイレから出る寸前、アルバートは呟く。

「今度会う時は、十中八九、敵としてだろうけどね」

アルバートが去った後、真はしばらくの間、トイレで佇んでいた。携帯を見れば、トイレに来てから、もう20分程度が経過している事になる。

いや、20分しか、と言うべきだろう。

実際、さっきまでの出来事は、たったその程度の時間にしては濃密過ぎた。

すると、トイレのドアが開き、待たせていた雄介が中へと入ってきた。

「あ、いたいた。何してんだよ真……ん？ 何か臭うな？」

真も気付いていなかったが、確かに、トイレの中には何かを焼いたような臭いが漂っていた。

アルバートが、炎で壁や床のタイルを焼いた時のものだろう。

「まあいいや。それよりどうしたんだよ？ そんなところでボーっとして」

「あ、ああ。ちょっとな……なあ、悪いけど俺先に帰るわ」

「えっ、急にどうしたんだよ？」

「あー……ちょっと用事思い出してな」

「……そうか。分かった、他の奴らには俺から言っとくよ」

「悪いな雄介」

「いつもの事だろ……まあ、相談ならいつでも乗るからよ。頼りにしてくれ」

「……ああ」

おそらく、雄介はトイレで何か起きた事を察しているのだろう。それでも、何も追求してこない気遣いが、真には温かった。

「じゃあな」

「おう、また今度どうか行こうぜ。電話するから」

「……ああ、ありがとな」

そう言うと、真はトイレから出て、そのままボーリング場を後にした。

帰路を辿る中、真の顔が優れる事はなかった。

中島が見せた最期の顔が、頭から焼き付いて離れなかったのだ。

真は溜め息を着き、近所の商店街へと差し掛かる。  
夕方になればそれなりに盛況なのだが、まだ3時前という事もあり、  
商店街は閑古鳥が鳴いていた。

「……いつもの風景、なんだけどな」

あんな事があつた後だと、何故か商店街の街並みも違って見えた。  
真は一度嘆息し、商店街の中を進んで行く。

すると、路地裏で何やら大きな物音が響き渡った。

「喧嘩か？」と、真は何となく路地裏の方を見やる。  
その時だった。

- 『正義』

「!?!」

何が何だか分からなかった。

ただ、突然、声が聞こえたのだ。

肉声ではない、だがはつきりとした何かの、声、が。

真は思わず辺りを見渡す。

が、商店街に他の人間は見当たらない。

真は直感的に悟った。

おそらく、今、路地裏で起きている出来事は、高い確立で、先ほどの  
ボーリング場での事件と何らかの関係がある事を。

真は、路地裏の前で立ち尽くした。

この中に行くという事、それはつまり、ボーリング場での出来事のような事を、もう一度体験する事を意味する。

冷静に考えてみれば、あそこで命を落としていても不思議ではなかっただろう。

真は今、選択を迫られているのだ。

路地裏に行くか、無視をするかを。

「……………」

しばらく考えた後、真は路地裏に向かって踏み出した。

別に、『世界争奪戦』とやらに関わるつもりは無い。

……いや、おそらくこの中へ踏み込めば、嫌でも関わる事になるのだろう。

だが、それでも真は、踏み出すその足を止められなかった。

彼は、知りたかった……のだ。

何故、自分はこんな訳の分からない能力を授かり、死に掛けるまでに至ったのか。

何故、それで人が死ななければならないのか。

真は、真実を知る為に震える足で、路地裏へと踏み込んだ。

薄暗い路地の中、アイラ・ジェンキンスは走っていた。

何故、彼女が走っているのか。

それは単純明快な答えで、彼女が何者かに追われているからだ。

その何者かが誰なのかは、アイラも知らない。

ただ一つ分かっているのは彼女を追っている者が『正義』だと言う事だ。

この場合、『正義』と言うのは、そのままの意味で使われるものは無い。

そもそも、少女を路地裏にまで追い込む行動が、正義であるとは到底言えないだろう。

「はあ……はあ……」

彼女は、息を切らしながら、路地裏を走り出す。

だが、彼女は名前が意味する通り、日本人ではない。

日本へ来たのも3日前で、ここが都道府県で言うどこなのかも知らない。

当然ながら、そんな彼女にこの辺の土地勘などある筈も無く、先の見えない暗闇の中、アイラの体力は削られていく。

「きゃー！」

遂にアイラは限界を迎え、足をもつれさせ、前のめりに転んでしま  
う。

そして、ようやく『正義』が彼女の前に姿を現す。

「……よく頑張った、と褒めたい所ですが……一つ、分かりません」

そう言い放った女は、20歳程度の日本人の女で、化粧一つされて  
いないのだが、それがかえって彼女の顔を凛々しく際立たせていた。

「はあ……はあ……」

「何故、能力を使わなかったんですか？ 貴女の能力なら、私のス  
タミナが底を突くまで逃げ切る事も可能だったのでは？」

「……………」

「……ああ、なるほど。土地勘、ですか？」

「……………！」

「どうやら、当たりのようですね」

アイラは「しまった」と言うように口を手で押さえる。

「貴女は何らかの目的があつてこの地を訪れた。しかし、私に追わ  
れている内に、ここが何処だか分からなくなった。つまり、闇雲に  
能力を使つても、自身の危険を高めるだけと判断した……もしこれ  
が正解なら、それは正しく、賢明な判断と言うべきでしょう」

ほとんど凶星だった為、アイラは何も言えなかった。

「まあ、貴女がここを訪れた理由は、この際、さして問題ではありません」

『正義』の女はそう言うと、アイラとの距離を詰める。

「貴女に残された道は二つ。一つ、私に協力するか」

「……嫌だと言ったら？」

「それならもう一つの道を選んでもらう外ほかないでしょう。即ち、死……です。確かに、……今の……私では、他の『アルカナ』に勝つ事は難しいでしょうが、貴女的能力ならば問題はありませんか」

その言葉に、アイラは思わず震える。

どちらを選んでも、彼女が生き残る可能性は薄いだろう。

こんな時、コミックやアニメなら、颯爽とヒーローが現れ、ピンチを救ってくれるのだろう。

だが、路地裏はおるか、表の通りにすら人が居ないこの場所で、助けが来る可能性はまずないと言える。

極限の選択を迫られたアイラは、手を組み、天に祈った。

- 誰か、助けて……！

その時だった。

突然、後方の鉄骨が、音を立てて倒れた。

そして、鉄骨の後ろに、悠然と立つ人影が一つ。

『正義』は、やれやれと言わんばかりに溜め息を吐く。

「……………どうやら、答えを聞くのはまだ後になりそうですね」

そう言つと、『正義』はゆっくりと立ち上がる。

「あれの始末が終わるまでには、考えを決めておいて下さい」

そして、『正義』は突然現れた人影を睨み付ける。

人影の正体は男で、おそらく制服であろうものを身に纏っていた。

アイラは思わず、思ったままの事を言ってしまう。

「……………ヒーロー？」

「……………え？ 俺が？」

アイラの言葉に、制服の男、新藤真は聞き返す。

やがて、頭を掻きながら、頬を引きつらせてその質問に答えた。

「だったらよかつたんだけどな」

## 第2話 受難と選択（後書き）

という事で、初バトルの終了、そして『世界争奪戦』という戦いの存在が明らかとなった2話でした。  
相変わらず展開が早いです。

「早過ぎてついていけない」という声がありましたら、是非教えてくださいと助かります。  
その他の意見もお待ちしております。

あ、あと、アルバートはアメリカ人です。

という事で次回予告。

立ち塞がる『正義』の『アルカナ』と、謎の少女アイラ。

『正義』相手に、真が取った行動とは……。

次回、「邂逅と提案」。  
頑張ります。

評価、感想、指摘等頂けたら幸いです。

あと、質問も頂けたらお答えします。

### 第3話 邂逅と提案（前書き）

今回から章タイトルつけました。

### 第3話 邂逅と提案

目の前に立ち塞がる『正義』を持つ女の前に、真は溜め息を吐きながら声をかける。

「……あのさ。一応聞いてくけど、俺はどうなっちゃうわけ？」  
「残念ながら、見られたからには死んで貰う事になります。あしからず」

「……だよな。いかにもって雰囲気だし」

いまいち緊張感の無い真の言葉に、『正義』は首を傾げる。

一般人ならば、ここで取り乱すなり逃げ出すなりするだろう。

だが、目の前のこの男からは、動揺した様子が全く見受けられない。

『正義』の女はじつと身構えると、真を見定める。

しばらくずっしりとした重い沈黙が、両者の間に流れた。

最初に動いたのは『正義』だった。

真に向かって走り出し、その拳で喉元を狙う。

が、真は特に避けようとせず、その拳を右手で受け止めた。

すると『正義』は驚いたように目を見開く。

「……貴方も『アルカナ』でしたか」

「その口ぶり、やっぱ能力を使うと、他の『アルカナ』……って奴等にも伝わるって事か」

「……？ ……まさか、今しがた能力が目覚めたのですか？ では、

貴方が先ほど……覚醒……した方でしたか」

「やれやれ、と『正義』は首を振る。

「ツイてませんね。まさか、……発現……したての『アルカナ』がいきなり渦中に飛び込んで来るとは」

「俺だつていきなりこんな事したくなかったよ。けど、首を突っ込んだからにはしょうがねえだろ」

そう言うと、真は『正義』を横に突き飛ばし、彼女に襲われていた銀髪の少女の手を取る。

少女は怯えた顔で震えていたが、真は彼女の手を引き、路地裏を駆け出す。

離れていく二人の姿を見ながら、『正義』は呟く。

「……やはり、このままでは勝てそうにもありませんね」

『正義』の女は、今日何度目か分からない溜め息を吐くと、二人の跡を追い始める。

「しかし、……発現……したての上に、彼の能力では、向こうも本気を出せてはいない様子。それも、このような場所では尚更でしょう」

『正義』は少し考えた後、一つの答えを口にした。

「……仕方ありません。惜しいですが、『恋人達』だけでも始末する事にしましょう」

真と銀髪の少女は、しばらく走った後、物陰にて息を潜めていた。もう少して表の商店街に行けるのだが、もし敵が商店街で追撃を仕掛けてくれば、一般人にも被害が出る可能性がある。そう考えた真は、『正義』を奇襲する作戦に切り替えた。だが、作戦を組み立てている内に、真はある事に気付いた。

何故、俺はここまで平静を保っていられるのだろうか？

自分でも、それが不思議でならない。

少なくとも、中島との戦いの際は、こんなに冷静ではいらなかった。

しかし、今回は、自分でも怖いくらい落ち着いている。

まるで、こんな事を何度も体験しているかのような……。

そんな事を考えていると、傍らにいる銀髪の少女が、真に声をかけた。

「あの……」

「ん？ ああ、悪い。もうちょっと我慢してくれ」

「あ、いえ、そうじゃなくて……あの、あなたも……『アルカナ』、なんですよね？」

「……ああ、そうらしい」

「……じゃあ、やっぱりあなたも私の能力を……？」

「……？ ごめん、話が見えねえ」

「あ、す、すいません……そうですよ、今日、……発現……したんですから、知る訳ないか」

「……あのさ、その……発現……ってなんなんだ？」

「『アルカナ』としての能力を、初めて開花させる事です」

「へー……」

「……」

「……」

沈黙が続く、真は困ったように頭を掻く。

女子と、それも年下の女の子の相手など、静香くらいしかした事が無い。

かと言って、静香と同じ扱いをすれば、確実に信用を無くすだろう。しばらく考えた後、真は大事な事を聞くのを忘れていた。

「ああ、そう言えば名前を聞いてなかったな」

「あ、そうでした」

銀髪の少女は、ホツとしたように微笑む。  
その仕草に、真は少しドキッとしてしまう。

「えっと、はじめまして。 アイラ・ジェンキンスって言います」

「新藤真だ。 見た目からして日本人、じゃないよな？」

「えっと。 出身はイギリスですが、小さい頃は日本で暮らしてました」

「なるほど。 だからそんなに日本語上手いのか」

真の何気無い一言に、アイラはきょとんとしたように目をぱちくりさせる。

何か変な事言ったかな？と、真は首を傾げた。

「あ、そうでしたね。 今日、覚醒、したんでしたか」

「……？」

「えっと、『アルカナ』 同士に言葉は関係ないんですよ。 どんな言語を話そうと、それが言葉としての意味を持っていれば、それは相手に伝わるらしいです」

「へえ。 便利だな」

そういえば、アルバートも随分と流暢に日本語を話していた。  
だが、本人からしてみれば、普通に母国の言葉を使っていたのだらう。

「まあ、一応私も日本語は話せますが」

アイラの言葉に、真はある疑問を覚えた。

「……………そういえば、何で君は日本に？」

「お祖父ちゃん……………祖父が倒れたんです。それで、何日か後に……  
覚醒……して……………その時は運良く他の『アルカナ』に見付からずに  
済んだんですが……………」

「……………そういえば……覚醒……って？」

「能力の目覚めの事です。ほら、頭痛があつたでしょう？」

「そういえば」と、真はボーリング場で出来事を思い出す。

考えてみれば、中島があそこに来たのも、真が頭痛を催して間も無  
くの事だった。

「……………なるほどな。つまり、……覚醒……も能力の発動と同様に、  
他の『アルカナ』に場所が割れるって事か」

「はい。一つ違うのは、能力の発動はある程度距離が近くなければ  
分かりませんが、……覚醒……どれだけは距離があるうが、その『  
アルカナ』の位置が分かるという事です。能力の名は分かりませ  
ん  
が」

「なるほど……………それで？……覚醒……は凌いだのに、どうしてあ  
んな奴に目えつけられたんだ？」

「……………えっと、使っちゃったんです、能力。それで、運悪く近くに  
いた『正義』に見付かっちゃって……………」

アイラは暗い顔をして、地面に視線を落とす。

「……すいません、巻き込んでしまつて」

「いや、俺が勝手にやってる事だから、気にしないでいいさ」

真がそう言つと、アイラは微笑む。

「……本当にすいません。私の能力で応戦出来れば……」

「そついや、君の能力つて？」

「あ、大事な事を言い忘れてました」

「へへ」とアイラは頭を掻く。

「私の能力は『恋人達』。能力は……」

しかし、会話はここで途切れてしまふ。  
何故なら

「……」  
「……」

聞き覚えのある声と共に、真達の横の壁が碎け散つた。

真は瞬時にアイラの手を引き、現れた敵から距離を取る。

「探しましたよ。この辺は意外に広いですからね」

「一生迷ってりゃよかったのにな」

ゆっくりと真達を見定めたのは、やはり、『正義』の女だった。

「……………どうやら、引く気はないようですね」

「ああ」

「ならば仕方ありません……………死んでもらいます」

そう言うと、『正義』は能力を発動させ、真に向かっていく。真は受身の構えを取り、攻撃に備えた。だが

「貴方に、とは言ってますがね」

『正義』の腕は真から逸れ、傍らにいるアイラを捉えた。真は完全に虚を突かれ、出遅れる。

「しまっ……………！」

言い切る前に、『正義』の右手が、アイラの右胸に深々と突き刺さった。

その手は完全にアイラの体を貫通しており、「ゴフツ」とアイラは声と共に、血塊を吐き出す。

瞬間、真の頭の中が真っ白になった。

「う、わあああああああ！！」

真は訳が分からなくなり、衝動のままに『正義』へと殴りかかる。何故か、ここで『正義』は舌を打ちながら、アイラから手を引き抜き、距離を取った。

「……僅かにずらされ、心臓への直撃を避けましたか。ここで仕留め損なっただのは手痛いものです」

「……ふざけんなよ」

平然と喋り続ける『正義』の言動は、とうとう真の精神的許容範囲を超えた。

だが、ここで『正義』はまたもや驚いたような表情を浮かべる。

「……どうやら、まだ彼女から話を聞いてないようですね」

「……どういふ事だ」

- 『恋人達』

唐突に、あの天声が真の頭に響き渡った。

確か、『恋人達』とはアイラのアルカナなるものだった筈だ。

クイ、つと『正義』は顎でアイラの方を指す。

真は反射的に、その方向を見やる。

そこには、先ほどと変わらず、蹲すくまるアイラの姿があった。

だが、その姿は、先ほどとは決定的に違う。

確かに服は血塗れのままだが、彼女の顔色は、およそ死にかけのそれとはかけ離れていた。

何故なら、彼女の傷が、もうほとんど塞がっていたからだ。

真は目を疑った。

どういう原理かは知らないが、『正義』の手は確実にアイラの体を貫いた筈だ。

「これが私の能力、『恋人達』です。触れたものの傷を、可能な限り修復する事が出来ます」

アイラは口元の血を拭いながら、自分の能力を解説する。

真は納得した。

確かに、これほどの能力ならば、『正義』が欲しがるのも無理はない。

敵に回すより、味方につけた方が得策と言えよう。

その様子を見ていた『正義』は溜め息を吐く。

「……正直、今が私の最後の賭けでした。私に、もはや反撃の手立ては残されていません」

「負けを認めるのか？」

「そういう訳ではありません。ここは一旦互いに引く、という事で如何でしょうか？　ここで無駄な血を流すというのは、双方得が無いかと」

『正義』の思いがけない提案に、真は振り返り、アイラへと助言を求めた。

「……どうしたらいいと思う？」

「そうですね……相手の言う事も一理ありますが、ここで『正義』を逃がすのは……あつ」

「どうした？」

真が問うと、アイラは『正義』がいる方を指差す。

真が振り返ると、『正義』は既にそこにおらず、離れた場所へと逃亡していた。

「あつ、この野郎！」

「三十六計何とやらです。それに、私には山岸洋子という名前があります。性別から考えても野郎ではありませんよ」

『正義』……山岸と名乗った女はそう言うと、路地裏の奥へと消えていった。

真はしばらくその方向を唾然としたまま見ていたが、やがて嘆息し、アイラの方を振り返る。

そこで、真は思わず固まってしまった。

確かに、アイラの体は元通りに修復された。

治りかけだった傷も、完全に塞がっている。

いや、だからこそ問題なのだ。

当然ながら、腕が体を貫通したという事は、その体を纏っている衣服も、同様に貫通している事になる。

だが、アイラが修復したのは傷のみ、穴の開いた衣服まで修繕された訳ではない。

つまり、今、アイラの右胸は、少女のような外見の割にはそれなり  
の大きさを誇る胸が、これ見よがしに露になっていたのだ。

当のアイラもそれ気付いてなく、始めはただキョトンとしていたが、  
真の視線を受け、ようやく自身に起きている事態を理解した。

茹蛸ゆめだこのように顔を真っ赤にすると、慌てて胸を手で覆い隠す。

すると、次の瞬間には、彼女の衣服は元通りになっており、右胸も  
しっかりと包まれていた。

「あ、そ、その能力、ふ、服とかにも使えるんだ」

「え、は、はい。な、何らかの傷があるものは、生物じゃなくても  
大体……」

顔を真っ赤にしながら、両者共、場に漂う気まずさを紛らわす。

二人共、しばらく押し黙った後、真が口を開く。

「え、えつと……そうだ、これからどうすんの？」

「一応、お祖母ちゃんの家泊まる事になってるんですが……危険なので、どこか適当に泊まるうかと。夏休みが終わるまではこっちに居るつもりです」

「泊まる当てとかあんの？」

「……これから探す所です。お金はあんまり持ってないので、出来るだけ安い所がいいんですが……」

「ふーん」

相槌を打ちながら、真はある事を考えていた。

確かに、その策は現段階で最も名案かもしれない。

だが、これを口にしようとすると、真はどうしても口籠もってしまう。

挙動不審な真の様子を見て、アイラはきよとんと首を傾げる。

「どうしたんですか？」

「あー……あのさ、考えてみたんだけど……」

「？」

「夏休みの間、俺ん家に泊まらない？ 安全だし」

「え……」

真の言葉に、アイラはしばらく呆けていたが、やがて我に返り

「それは願ってもない話ですけど……いいんですか？」

と、予想外の反応を真に返す。

ひよっとしたら、イギリスでは男友達の家泊まるのも普通なのか  
もしれない。

それか、アイラだけが特別変わっているのか。

だが、実際、真のこの提案は、双方共損をしない良策だと言える。

『恋人』を持つアイラを味方につければ、『世界争奪戦』とやらも  
有利に戦えるし、アイラとしても、宿が手に入る上に、少しは信用  
の出来る、能力者、と共闘出来る訳だ。

正直、真はそこまで考えた訳ではなかったのだが。

「あ、ああ。親も単身赴任中だし……」

言った後に、真は失言に気付く。

これでは、女を無理矢理家に誘い込む軟派男と大差は無い。  
いや、平たく言えばそうなのかも知れないが。

だが、アイラは全く気にする素振り無く、心配そうな顔色を浮か  
べる。

「そうなんですか……大変ですね」

「い、いや、別に……それで、どうする？」

アイラはしばらく考えた後、顔を上げてその答えを告げる。

「じゃあ……お世話になってもいいでしょうか？」

「あ、ああ。部屋も余ってるし、それでいいなら……」  
「ありがとうございます」

アイラは屈託の無い笑顔を浮かべ、真はまたもやドキッとしてしま  
う。

恥ずかしさを紛らわすように、真は早口でまくし立てる。

「じゃ、じゃあ、他の……能力者……も来るかもしれないし、さっ  
さと行こうぜ。ここからすぐ近くだし」

「あ、はい。よろしくお願いします」

真はアイラを連れ、商店街から去っていく。

だが、真の読みは一手遅く、既に、先ほどの一部始終を見ていた男  
がいた。

その男は、真が知っている顔だった。

男はしばらく2人の後ろ姿を見ていたが、やがて大きな溜め息を吐  
く。

「……『アルカナ』の反応があつて来てみれば……どうやら、思っ  
たより機転が利く男らしい。見くびっていたよ」

その男は懐から煙草を取り出すと、そのまま口に啜えて、火をつけた。

「シンドウ マコト、か……」

男……アルバート・ベイルは口から煙を吐き出し、そのまま煙草を投げ捨てる。

そして、少し寂しそうな、どこか残念そうな表情を浮かべた。

「だから、次に会う時は敵だと言ったんだ」

アルバートは憎々しげにそう吐き捨てると、真に悟られないように、2人の後を追った。

### 第3話 邂逅と提案（後書き）

という事で、『恋人達』の『アルカナ』、アイラとの共闘（？）回でした。

これで登場した『アルカナ』は5人。

まだ3話なのにこんなに出しているのかと、たまに自分でも不安になりますw

そして、真とアイラは同棲生活へ。

まあ、真は真性チキンなので、万が一にも手を出すという事はありません、はい。

そんなこんなで次回予告。

夏休みの間、アイラと生活する事になった真。

そして、突然頭に響く『声』と共に、真は『世界争奪戦』が何たるかを知る。

次回、「解明と決意」。

頑張ります。

評価、感想、指摘等頂けたら嬉しいです。

あと、質問等も頂けたらお答えします。

## 第4話 解明と決意（前書き）

説明回です。

あと、今度こそ章タイトルつけましたw

#### 第4話 解明と決意

商店街から10分ほど歩いた後、真とアイラの二人は、新藤宅に到着する。

どこにでもあるような二階建ての家だが、一人で住むには些か広過ぎた。

玄関に入ると、真はアイラを通し、居間へと案内する。

その時、真はある事に気付き、アイラの足元をまじまじと見つめる。

「？ なんですか？」

「あ、いや。……靴、脱ぐんだな」

真としては、アメリカやイギリスなどの外国では、家の中でも土足というイメージがあったのだが、アイラはきちんと家の前で泥を落としてから靴を脱いでいた。

「ああ、なるほど。確かに、少し前までは土足で生活していたそうですね。でも、今じゃイギリスのほとんどの世帯では、家の中では靴を脱ぐものとなってます。誤解されがちですけどね」

「参考までに。何で脱ごうって話になったんだ？」

「……家の中が汚れるから、らしいです」

「……さいですか」

込み上げるツツコミを、真は何とか喉元で押さえた。

アイラを居間のソファに座らせ、蒸し暑い空気を入れ替える為、窓を開ける。

次に、真は冷蔵庫から麦茶を取り出すと、二人分のコップにそれを注ぐ。

「紅茶とかがいいんだろうけど……あんまり飲まなくてな」

「あ、いえ。お構いなく」

真はコップを持っていくと、アイラに麦茶を差し出す。

が、アイラはきよとんとしたまま、麦茶を見つめるだけだ。

「あ、ひよつとして麦茶飲めなかったか？」

「いえ、そういう訳では……日本では、夏は麦茶を飲むんですか？」

「ん？ ……まあ、家によるだろうな。家は、夏は大体麦茶だけだな……珍しいか？」

「はい。イギリスでは、麦茶自体、あまり飲む風習がありませんから。まして、冷やした麦茶なんて初めてです」

「……飲めるか？ あとは水しか無いけど……」

「あ、大丈夫です」

アイラはそう言うと、そつと麦茶を口にする。

すると、突然目を見開き

「……驚きました。日本の麦茶ってこんなに美味しいんですね。正直、苦手だったんですが」

「口に合ったようならよかったよ。まあ、美味しく感じるのは汗かいたからだろうけどな」

麦茶の味が外国人にも通用する事を知り、真は思わず高揚してし、コップの中身を一気に飲み干す。

アイラも飲んでしまったらしく、コップの底を覗いていた。

「……おかわり、いるか？」

アイラは軽く頬を紅潮させると

「……お願い、します」

と呟く。

真は微笑みながら、台所へと向かった。

二杯目の麦茶も飲み終わり、時計を見ると、既に4時を指していた。一息吐き、真が本題を切り出そうとした時、アイラがそれを遮るように口を開く

「あの、新藤さんは何時くらいに、覚醒、したんですか？」

「ん？ あー……確か、2時くらいだったかな？」

「そうですね……じゃあ、……そろそろ、……だと思います」

アイラのどこか引つかかる物言いに疑問を感じ、尋ねようとした時だった。

「ッ！？」

突然、真の頭に衝撃が走った。

そして、次々と頭に情報が叩き込まれる。

『世界争奪戦』……『アルカナ』……これまで分からなかった事が、光で照らされるように明らかになっていく。

やがて、全てが頭に入りきった時、あまりの情報量の多さに、真は思わず吐き気を催した。

そんな真に、アイラが心配そうな眼差しで見つめる。

「大丈夫、ですか？」

「……いきなり、頭の中に入ってきたんだ、色々、それで」

言っている事が支離滅裂になりながら、真は先ほどの出来事をアイラに伝えようとする。

「大丈夫。私も最初はそんな風でしたから」

「……君も、さっきのを？」

「はい。というか、覚醒した能力者は全員です」

頭の中を必死に整理しようと、真は情報を組み立てる。

が、あまりに突然、それも多大な情報量だった為、うまく処理が出来ない。

すると、アイラが優しげに語り掛ける。

「……一つ一つ、整理していきましょう。私も手伝いますから」

「あ、ああ。悪いな」

「いえ。助けられた恩に比べれば」

そう言うと、アイラは手持ちのバッグから、一組のカードの束を取り出す。

トランプにしては薄いその束に、真は見覚えがあった。

いや、実際には見た事は無いのだが、真はそれを、知っていたのだ。

「……それは……タロットカード、か？」

「はい。占いなどで有名ですね」

そう言うと、アイラはカードをテーブルの上に広げる。

大体二十枚ほどだろうか。

が、真には絵柄の意味から何まで、はじめて見る筈のそれが分かっていたのだ。

「もう分かっているかと思いますが、私達はある戦いに巻き込まれました。……早い話、特殊な能力を授かった『アルカナ』と呼ばれる者同士の……殺し合い、です」

「……………」

「『アルカナ』の数は『世界』を覗いたタロットカードの数で21人。能力の名前も、タロットカードに暗示されているアルカナと同じです」

64

「私はこれです」と、『LOVERS』と書かれたカードを指差す。

「番号は6。あ、この番号に深い意味はないのでご安心を」

「ああ」

「それであたの『アルカナ』は……あっ」

アイラが指を刺そうとすると、真がそれを手で制した。

「……………分かってる」

そう言うと、真は22枚の中から1枚のカードを選ぶ。  
先ほど頭に叩き込まれた情報の中には、真の『アルカナ』の種類と能力も含まれていたのだ。

「……『STAR』。『星』だ」

「はい。番号は……17ですね」

アイラはメモを取り出し、せつせと書き込んでいく。

「……それは？」

「『アルカナ』についての情報です……と言っても、私が把握している能力者はあなたと私、そして『正義』……あとは、昼間に能力を行使していた『太陽』と『魔術師』くらいのもですが……何かご存知ありませんか？」

「……『魔術師』……死んだよ。いや……半分は俺が……殺したみたいなものだ」

「……！ そう、でしたか」

2人の間に気まずい沈黙が流れる。  
破ったのは真だった。

「……それで、次に勝利条件の確認だ」

「あ、は、はい」

「勝利条件は二つ。間違い無いよな？」

「ええ。私の頭の中に入ってきた情報にも、そうありました」

「一つは、能力者を……殺害する事。もう一つは……」

「意識を失った能力者を、教会の中へ連れて行く事。あ、教会内で意識を失わせるのも有りみたいです。この手段を用いた場合、その『アルカナ』の『世界争奪戦』で受けた傷と能力、そして『争奪戦』に関する記憶は全て失われるようですね」

「……こういうの言いたくないけどよ。正直、前者の方法が楽じゃないか？ 気絶させるにも、相手が殺す気で挑んできたら、難しくなるだろうし」

「……おそらく、これはあくまで自分から『世界争奪戦』を降りる時に使うべきものと考えた方がいいと思います。教会で眠れば、普通の人間に戻れるわけです。そう考えた方が色々合点がいきますからね」

「……なるほどな。頭、いいんだな」

「い、いえ、そんな事は……」

照れたのか、アイラの頬は紅くなっていた。

「……勝利条件はこの辺でいいか。……あと、重要な点がもう一つだ」

「……勝者の権限、ですね？」

真は頷く。

アイラはテーブルのカードの中から1枚を取ると、それを真に向ける。

「最後に勝ち残った者が手にするもの、それは『世界』。能力は……」

アイラは一度間を置き、ゆっくりと口を開く。

「……所持者の望みを一つだけ叶える……事、です」

「……正直、嘘臭い話だと思ってたんだが、君も言うんなら間違いないよな」

真は深い溜め息を吐く。

それを見たアイラは悲しそうな顔をする。

「……やっぱり、迷惑でしたか？」

「え？」

「……早い話、私が『争奪戦』からリタイアすればいいだけの話なのに……関係無い新藤さんまで巻き込んでしまった……」

アイラの目にはつつすらと涙さえ浮かんでいた。

「い、いや、迷惑なんて……」

「……でも、私がここに居なければ、シンドウさんは『争奪戦』を辞退出来ますよね？ ……やっぱり、私なんか……」

「……一つ聞かせてもらいたいんだけどさ。君には願いがあるから『争奪戦』を辞退出来ないんだよな？」

涙を浮かべたまま、アイラは頷く。

「……参考までに、その願いつて？」

「……私、日本に来るまで、『アルカナ』を悪用する人なんていないと思つてました。……でも、それは私の理想だったんですね。

亡くなった『魔術師』の方も、能力を使って酷い事をしてたとか」

「……ああ」

「分かってます。世界はそれほど綺麗じゃないって事も、私の方が……異常……なんだって事も……だけど、こんな戦い、おかしいんです！ こんな戦いのせいで人々が傷ついて……おそらく、この先もそういう人達は増え続けるんだと思います」

「…………」

「だから。私、決めたんです」

アイラは涙を拭い、決意に満ちた顔で真をじっと見つめた。

「もし私が最後まで生き残ったら……この戦いで亡くなった人達を生き返らせる、って」

「！」

この時、真は人生で一番の衝撃を受けた。  
今まで真が出会ってきた人間の中で、彼女ほど純粹に人の幸せを願った者はいなかった。  
いや、おそらくこれから先も出会う事は無いだろう。

「え、あ、シンドウさん？ 大丈夫ですか？」

「え？」

「だって……涙が……」

頬を拭ってみれば、確か頬が濡れていた。  
どうやら、自分でも気付かない内に泣いていたようだ。

この時、真の中で何かが変わった。

何が変わったのかは自分でも分からない。  
だが、目の前のこの少女が、確かに真の中の……何か……を変えたのだ。

彼にとっては、それだけ分かれば十分だった。  
流れる涙を拭い、真はこれまでにない覚悟を持ってアイラを見る。

「君を手伝う。いや、手伝わせてくれ」

「……………」

あまりに意外だったのか、アイラは啞然としていたが、やがて、厳

格な表情で真を見つめる。

「……それは、凄く嬉しい事なんですが……その、いいんですか？  
そもそも、『生命の蘇生』なんて願いが叶えられるなんて分かり  
ませんし……。死ぬかもしれない上に、その末には何も得られない  
かもしれない、茨の道ですよ？」

「……質問を質問で返すのもただけど、何故、君はそれが分かっ  
てるのにその道を行こうとするんだ？」

「……理由なんてありません。ただ」

「ただ？」

「人が悲しんだり、苦しんだりするのを見るのって、凄く嫌なんで  
す」

その一言はシンプルだったが、いや、シンプルだったからこそ、真  
の胸を揺さぶった。

どうして、ここまで人の為に生きられるのだろうか。

それは見方を変えれば、恐怖さえ感じる疑問かもしれない。

だが、真はそうは思わなかった。

アイラの考え方が、人を思い遣る心が、今まで見た何よりも尊く思  
えたのだ。

「……さっきの質問に答えてなかったな」

そう言うと、真はアイラに手を差し出した。

「俺は、君についていくよ」

アイラは少し躊躇ったような顔をした。  
やがて、覚悟を決めたように真を見る。

「……一つ、条件があります」

「ああ」

「……絶対に死なないって、約束してくれますか？」

この質問に、真は一瞬、答えるのを躊躇った。  
しかし、やがて僅かに微笑みかける。

「……ああ。17で死ぬるほど、密度ある人生は送ってねーからな」

おどけてみせる真に、アイラは「くすくす」と笑う。  
やがて、思い出したように顔を上げた。

「あ、17という事は私の方が年上なんですね」

「……ん？」

「え？」

アイラのさりげない一言に、一瞬、時が止まったかのように感じた。

真は停止した思考を回転させ、事態を理解しようとする。

「……えっと、ちょっと待ってくれ。……おいくつでしょうか？」  
「今年で18になりますが、何か？」

どうやら、この問答は初めてじゃないらしく、アイラは笑顔で真の疑問に答えた。

が、その類は確かに引きつっていた。

「一ついいですか？」  
「な、なんでしょうか？」  
「いくつくらいに見えました？」

笑顔のまま問いかけるアイラだったが、その異質な雰囲気は、真に嘘を吐く事を許さなかった。

「……正直に言えば、13、4くらいかと……」  
「へー、そうですね。ふーん」

この時、真は理解した。

「年齢よりも幼く見える」「これがアイラの触れてはならないタブーだという事に。」

「いいんです。私なんて、所詮、童顔幼児体型なんです」

拗ね始めたアイラに対して、真はなんとかフォローを入れようと口を動かす。

「い、いや！ そんな事ないって！ 十分18くらいに見えるって！」

「……本当ですか？」

「あ、ああ」

「じゃあ、具体的に言っただの辺が18に見えます？」

「えっ！？ えっと……そりゃあ……」

真の頭が、かつてないほど高速に回転する。

そして、真が辿り着いた答え、それは先ほど、路地裏で起きた出来事だった。

ハッとして、アイラに大きな声でそれを告げた。

「胸とか！」

この日、真は生まれて初めて女の子にビンタを受けた。

アイラと真が話し込んでいる頃、新藤宅の前に立っていたアルバート・ベイルは、本日三本目となる煙草をふかしていた。しばらく新藤宅を見ていたかと思うと、元来た道を引き返す。

「……顔も知った、住所も覚えた。首尾は上々、と言った所か」

煙草の煙を吐き出し、メモ帳を取り出す。

それには、新藤宅の住所、真の外見などが書かれていた。

もう4時を過ぎていたが、夏らしい肌を突き刺すような日が差し込んでいる。

そんな暑さを感じさせないような涼しい顔で、アルバートは呟く。

「……分かってはいたけど、殺し合いというのは、嫌なものだね」

吸い終わった煙草を投げ捨て、アルバートは人波の中へと飲まれていった。

#### 第4話 解明と決意（後書き）

という事で、『世界争奪戦』のルール説明となった4話でした。

分かり難かったかもしれないので、再度ルールと設定の確認を。

- ・ 21人の『アルカナ』という能力者達によって行われる殺し合い。
- ・ 勝利条件は二つ。
- ・ 一つ、相手の『アルカナ』を絶命させる事。
- ・ 二つ、意識を失った『アルカナ』を教会に連れて行く。また、教会内で意識を失わせる。この手段を用いた場合、相手の『アルカナ』は『世界争奪戦』で負った傷と能力、『争奪戦』に関わる記憶の一切を失う。
- ・ 『アルカナ』が能力を行使した場合、近くにいればその『アルカナ』の能力の名前、居場所が分かる。
- ・ 新たな『アルカナ』が、“覚醒”した場合は、どんなに距離が離れていてもその『アルカナ』の居場所が分かる。ただし能力の名は分からない。
- ・ 『世界争奪戦』のルールは、“覚醒”した約二時間後程度に“説明”される。
- ・ 勝ち残った一人の『アルカナ』に一つだけ望みを叶える『世界』が与えられる。

こんな所でしょうか。

あと、これは説明していませんが、“覚醒”した後、初めて能力を行使する事を“発現”と言って、これは“覚醒”してから最長でも10分以内には起きるという設定です。

まあ、ルール説明は二時間後なので、それまで生き残らなければいけませんわ

ルールに穴がありましたら、是非教えてくださいとありがたいです。

そんなこんなで次回予告。

初めての戦いを終え、真達に休息が訪れる。  
アイラと共に、束の間の夏休みを楽しむ真。  
だが、不穏な影は確実に真達に近づいていた。  
次回「日常と崩壊」。  
頑張ります。

評価、感想、指摘等頂けたら嬉しいです。  
質問も頂けたらお答えします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2824z/>

---

世界と未来と少年少女

2011年12月18日01時50分発行